

<第2学年>

1 学習のテーマ

3年間のテーマ
『AGO プライド』
今年度のテーマ
「自分から動く」

2 1年間の取組の概要

① 1年間の流れ

今年度も「ホタル」
「文化」「自然」「食」の
4つのグループに分か
れて活動を行った。活動
の根幹は、「AGO プライ
ド」という学年目標のも
と、「地域に根ざした活
動からぶれないこと」、
「昨年度の活動が活か
される活動になること」
の2つを絶対条件とし
て取り組みを進めて行
った。昨年同様、活動の
内容は教員から下ろす
のではなく、生徒が考え
る。各チームの大まかな
活動については、右の表
を見ていただきたい。ま
た、詳しい活動について
は、安居中学校のホーム
ページの各学年の総合
のページにある2年生
のページを見ていただ
ければと思う。

② 「共につくる」という視点

今年も共につくと
いう視点で基本的に活動
の方針は、生徒がしたい

<1年間の取組>



ことをするということである。ただ、やりたいことをやれば良いという本筋からの脱線が大いに起こりえる。そのため、「活動目標の共有(AGOプライド)」「活動の年度目標決めの際のヒアリング」「活動実行の際のヒアリング」の3つは必ず行うようにした。

活動の中から1つ紹介すると、SNSでの情報発信講習会が上げられる。この活動も生徒から出てきたものだ。自然チームでは、自分達の活動を広く知ってもらいたいという課題があった。そこで、どうすればいいだろうという話し合いがチーム内で開かれた。すると、チーム内のメンバーがSNSでアップしてみてもどうかという話になり、そこから正しいSNSの使い方を勉強する必要があるということになった。そこでスクールサポーターの五十嵐さんに協力を仰ぎ、一緒に勉強する勉強会を開いた。その後、twitterとインスタグラムを学年で開設し情報を発信する運びとなった。このときの様子は、福井新聞に掲載された。(図1)。通常の学校だとSNSを使っている、使っていないに関わらず、全員が一方向的に情報を与えられるが、自分たちが使うことで、生きた知識として彼らの中に入って行くのではないかと考えている。



図1 福井新聞の記事

② 成果と課題

4つのチームに分かれて行ったので、それぞれのチームごとに生徒がまとめた成果と課題を記し、教員が考える課題も書いていく。

〈ホテルチーム〉

6月にホテル観察会を今年も地域の方々と開催することができた。また、今年度は、昨年度失敗したホテルを育て放流する活動も成功することができた。ホテル観察会の様子は福井新聞に取り上げられた。

〈食チーム〉

郷土料理コンテストに申し込んだが、レポート作成の際もリーダーに任せっきりになりチームとしての活動ができなかった。その反省も活かし、来年度のコンテストに向けて動き出している。

〈文化チーム〉

ふるさとCMコンテストに出品し、安居の良さを30秒という時間にまとめることができた。出品の結果、奨励賞をとることができた。作ったCMは、駅前のスクリーンで流されたが、地域に還元という意味では、取り組みの内容の検証が必要であると考えます。今後どういう活動にしていくべきか考えたい。

〈自然チーム〉

全国ビオトープコンテストに向けて、「安居のビオトープ図鑑」の作成と絶滅危惧種であるミズアオイを種から育てビオトープに植えた。それをまとめてコンテストに応募したところ、6位に入賞することができた。また、SNSも開設し、広く活動を知ってもらう工夫をすることができた。しかし、SNSのフォロワー数もまだまだ少なく十分に活用仕切れていない。今後広報面でも工夫が必要である。



図2 ホテル観察会の記事

<教師の学び>

—森阪 美文—

1年間、2学年の生徒とともに学習に取り組んできてわかったのは、彼らが「本当に地域を好きで、地域を追究し、地域をPRしたい」と感じていることだ。「言われてやっているのではない、自らやりたいでやっている」ことがそばにいてストレートに伝わってきた。例えば、それは、食チームの生徒が、休み時間などに自主的に集まり、頭を付き合わせて、次年度に取り組む内容を考えていたり、文化チームの生徒が、クラス全員からのアドバイスや教員の言葉を受けて奮起し、CM映像を締め切り間際まで、飽きることなく、早朝から、時には家にデータを持ち帰り夜中まで改善し続ける姿であったり、ホタルチームの生徒が、ホタルの卵や幼虫の様子が気になって、一日のうちに幾度となく水槽をのぞきに行く姿であったり、自然チームが、公民館横のプランターへ、毎日のようにミズアオイの成長を記録しに行ったり、ビオトープコンテストにおいて、審査員に自分たちの取組を熱く語る姿であったりしたと思う。1年間地域と共に取り組んできたからこそ、2年目、真に自分が追究したいことができるチームを見極める力がつき、そのチームで、昨年度よりもさらに密度の濃い活動ができたのだろう。

現在、「邁進の会（立志の集い）」に向けて、実行委員中心に、生徒たちは悩みながら、自分たちの手で集いをつくりあげようとしている。「邁進の会」は、彼らにとって、慣れた地域の活動とは違い、迷うことも多いようだ。だが、担任をはじめ私たち学年スタッフは、自ら語りすぎず、待つ姿勢を大切に、集いの制作過程を通して、生徒の学びを深めさせたいと考えている。この経験を経て、さらに生徒と私たち教員が成長し、安居プライド最終年を実り多き年にしたい。

—川端 康誉—

ここまで4つのチームで活動を行ってきた。それぞれのチームごとに見れば自分たちの課題を解決するべく考え、その中で成長が見えた。しかし、学級全体としては、まだ活動できていない。生徒たち個々人が成長してきた今、そろそろ全体で動いても良いのではないかという生徒からの意見もあった。来年度は全体でこの安居地区にプライドを持てる集大成として活動を進めていきたい。

—梅村 泰枝—

今年度育休から復帰し、初めて2年生と関わることになった。この1年を通して感じたことは、計画性を持つということである。限られた時間の中で優先順位を付け、何から行動していくのか、そして目指す目標までにどのような道のを辿るのか、見通しを持った活動が大事だということである。この2年生は、スイッチが入るまでが遅く、活動の後半になってバタバタと慌てるということが多々あった。それは、意識して見通しを持って行動していなかったからだと考える。しかし、教員もどこまでに何をさせるかという計画が曖昧だったと考える。教員が道筋をつけながら、生徒自らが考えた計画や目標がぶれないように支えていくことが必要だと感じた。来年度も、生徒への関わり方を意識し、彼らの学びを支えていきたい。